

化学物質過敏症とは？

東京学芸大学 特命教授

竹内 武昭

皆さん、化学物質過敏症という病気をご存じでしょうか。名前の通り化学物質に過敏な症状を呈します。空気中の化学物質の場合もあれば皮膚や消化管を通しての接触も含まれます。患者の75%は女性で30歳から50歳が好発年齢ですが、20歳代の発症も増加しています。空気中で原因となるものには、柔軟剤、香料、洗剤、香水など、日常生活で使われているものが多く含まれます。

日本では2000年ごろより香りの強い柔軟剤が普及し、香害の苦情が国民生活センターの全国消費生活情報ネットワークシステムや日本消費者連盟に多く寄せられるようになったと言われています。これらの苦情が多かったため、国立医薬品食品衛生研究所生活衛生化学部の研究グループは、市販の高残香性衣料用柔軟仕上げ剤20製品を対象として、それぞれの製品から抽出した揮発性の成分を評価しています。その結果18製品が侵害受容器であるTRP イオンチャンネルの一種を活性化し気道過敏性の亢進を引き起こす可能性が示唆されています。また洗剤に含まれるマイクロカプセルが人体にも悪影響を及ぼすとみられ、ヨーロッパでは規制が始まっていますが、日本では法律がありません。

化学物質過敏症の症状は多彩で、化学物質や個人により異なります。頭痛、めまい、ふらつきなどが多いですが、不整脈や自己免疫異常などの重篤な症状をきたすこともあります。これらの症状が急性で軽度の場合はよいのですが、慢性的で強度の場合は日常生活に支障が出てきます。

症状が多彩で、物質の暴露時に症状が生じることから診断は難しく化学物質過敏症だと気づかずに、多くの病院を転々としても診断が見つからないことがあります。まず自分自身と治療者が化学物質過敏症を疑うことが先決です。

治療法が確立していないため、原因となる化学物質を避けることが、最も有効な対処法と言われています。そのため、人が集まる場所では、洗剤、柔軟剤、香水などの香りが過度にならないように、使用を控えるなどの配慮をすることが重要です。

参考 日本医師会「健康ぷらざ」No.550

<https://www.med.or.jp/dl-med/people/plaza/550.pdf>